

将来の伴侶に達也を求めたら却下されたので四葉から家出します

僅かな希望

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

四葉家当主である母に、将来の伴侶は達也が良いな！と言つたら却下されたので家出したお話。

なお、認めてくれるまで帰る予定はない模様。

目

次

プロローグ

プロローグⅡ

入学編

一話

二話

10 8

5 1

プロローグ

その少女は生まれつき狂っていた。

少女は創った。望まれる姿を。

少女は創った。自ら望む家族を。

少女は創った。他人の記憶さえも。

こうして少女の世界は創られた。

こうして四葉 望夢(のぞむ)という少女は創られた。

ある日少女は気付いた。自分には感情が足りていないと。世界に望まれる人になるために自分の顔を成長するにつれ母親に似るように創つていたが、まだ足りていなかつた部分があつたのだ。勿論少女は足りない感情を創ろうとした。だがそのことに気付くには遅すぎた。

少女の創つた世界、本来ならば少女はその世界を支配する地位だつただろう。だが少女は違つた。そう言つた地位を欲する感情すらも欠けていた。

故にその世界の少女の地位は当主の愛娘、ということになつてい
る。そして、創られた世界の住人は誰もその**眞実**設定を知らない。ならばそれを自ら乱す必要もないのかもしれない。

少女は自らの感情の欠如を親に告げることにした。だが返つてき
た言葉に少女は少し驚いた。

” その空白を使って普通の魔法を使えるようにしてしまいましよ
う ”

ただ少女は驚いただけで拒否はしなかつた。嫌がるという感情も欠如しているからだ。その実験の過程で、残つてゐたある感情はさら
に強くなつてしまつたが、それでも少女は感謝していた。これから起
こり得るかもしれない不便なことが無くなると思つたからだ。

だが実験を施した当主は少なからず後悔をしていた。自分の愛娘
に対して実験を行つたのだ。それ以来、当主は少女に人一倍の愛情を
注ぎ、叶えられる限りのことはしてきた。

全てが創りものだとも知らず。

*

私がこの世界^{世家族}を創つてから数年、私は正式に四葉家の次期当主として認められた。ならばここで一つ我儘を言つてみるのも良いかもしない。

「お母様、一つお願ひがあります」

「何でも言つて頂戴。出来る限り叶えてみせるから」

「ですがその前に一つだけ、前提としてのお話をさせてください。現在、私を突き動かす感情は二つしかありません。まあお母様なら知つていて当然でしようが」

「ず、随分と心が痛む話ね……。それで、それがどうしたと言うのかしら?」

「率直に言わせてもらうと、私は将来の伴侶に達也を求めます。これは私の一つの感情に従つた結果でもあります」

「——それを認めることは出来ません。これは母としてではありますん、四葉家当主として認めません」

少なからず私はお母様の雰囲気が悲しそうになつたのを感じた。なぜ悲しそうなのだろうか、娘が伴侶を決めたことを親が知る際には大抵、喜びか怒りのどちらかの感情によつて動くと思つていた。

だがお母様は違つた。

四葉家当主として反対してきたのだ、何か事情があるのは理解できる。しかし私とて生半可な気持ちでこの言葉を告げたのではないと理解して貰わねばならない。

「これは私がお母様にする唯一の我儘かもしれません。それでも駄目でしょうか……?」

まず第一の手段、可愛い娘が心からのお願いしていきますアピールだ。勿論涙目も忘れずにしておく。

「うつ……。そ、そんな可愛い顔でお願いしても駄目なものは駄目よ望夢ちゃん！」

まず間違いなく効果抜群だろう。ちゃんと付けなんて久しぶりにされた気がする。しかし普段のお母様とは思えないほど予想外に粘る。本来の予定ではこれで陥落している筈だったのだが予想以上に事情が事情らしい。

ならば第二の手段、こちらも限界まで粘る作戦だ。

「私は本当に達也のことを好きなのです！どうして駄目なんですか！確かに達也がこの国、いえ四葉家の貴重な戦力なのもわかつています。しかしそれでも好きになってしまったのです……！どうかお願ひですお母様、お許しください……」

ここでシクシク泣くことも忘れない。

このタイミング思わぬ邪魔さえ入らなければ、まず間違いなくこのお願ひは叶えられたであろう。だが四葉家執事序列第一位の葉山さんがお母様に何か囁いているではないか。

「葉山さん、これは当主と次期当主としてではなく数少ない家族水入らずの話なのです。ですから邪魔をしないで頂けますか？」

「それは大変失礼いたしましたお嬢様」

なので思わず笑顔で怒つてしまふのも仕方ないとと思うのだ。しかしこの葉山さん、お母様の側近とだけあってメンタルも滅法強い。さらに言葉に説得力もあるときた。これは私の負けとなるのは容易にわかる。

実際お母様は母としての顔ではなく当主としての顔となつてしま

まっている。

「それでも認めるわけにはいきません。これはその程度の話で収まるものではないのです。理解しなさい望夢さん」

「——その程度の話？……そうですか、よくわかりました。お母様の認識がそうであるならば、私も認識を変えなくてはなりません」

「い、一体どうしたのかしら望夢さん？」

「私、四葉 望夢は本日よりお母様が認めてくださるまで家出させて頂きます……！確かに来年達也たちは第一高校へ入学するのでしたね！もう四葉がどうとか知つたことではありません！私も第一高校へ入学し思う存分、達也に、アピールさせて頂きます！覚悟していくくださいね！」

後ろからお母様が現実を上手く認識出来ていらないような声が聞こえたが、全て無視し告げることだけ告げ私は退出したのだった。

プロローグⅡ

さて、勢いで家出したのは良いが正直なところ暇である。四葉家秘伝の『フラッシュ・キャスト』さえあれば勉強も試験も合格は間違い無しなのだ。

だが私はここで閃いてしまった。

第一高校には深雪さんも入学するのではなかつただろうか。深雪さんは四葉家内では私と張り合える数少ない人物だ。

ということはつまり、こういう流れが出来上がるのではないか。深雪さんを倒して主席合格→深雪より上だなんて凄いじゃないか、と達也に褒められる→結婚。

——我ながら完璧な流れだ……。そうと決まればまずは司波家にご挨拶へと向かわなければならぬ。思い立ったが吉日だ。

*

思い立ったが吉日、という言葉はどうやら嘘らしい。

『瞬間移動』で達也の隣に行こうとしたが行けないのだ。

と言つても原因はわかりきつてている。達也本人が拒絶しているのだ。流石の私も好きな人から拒絶されるのは悲しいらしい。

そもそも『瞬間移動』というのは、相手の隣に自分がいる、という状態を創つて初めて可能となる魔法だ。つまりはその前提となる定義付けを破壊されてしまったら私は移動出来ない。

なので私も本気を出すことにした。恋する乙女の本気を舐めてもらつては困る。

そもそも定義付けが一つだからいけないので。これを破壊出来るるのは達也一人、つまり物量作戦こそが正義！

まずは達也の周りに十個定義付けをする。そして同時に魔法発動、をしようとしたらまた破壊されてしまった。

正直言つて、いい加減諦めて欲しい。この魔法を同時発動するときの私の脳内をぜひ想像してみて欲しい。

定義付け一つの場合だと達也の隣に私は一人だ。

しかし、定義付けが十個の場合は達也の隣に私が十人ということになる。

一体なんの悪夢だと言うのだ。達也は私一人のものであって、いくら私であろうと流石に譲ることは出来ない。

流石にこれ以上の悪夢を許容することが出来ない私は今日は、諦めるのだった。

*

「ふう、とりあえずは落ち着いたか……」

「ご無事ですか、お兄様？」

「ああ。だが叔母上から緊急で連絡が来た際には何があつたのかと身構えたが、すぐに意味を理解できたよ……」

「……？ それはどういう意味でしようか？」

「いや、何でもないさ。それより深雪、入試ももうすぐだ。油断してうつかりミスをしてはいけないからね、俺と一緒に最後の確認でもしておこう」

「はいお兄様！」

この場では上手く誤魔化すことに成功した達也だつたが内心ではかなり冷や汗をかいていた。

当主である真夜からの連絡で

”望夢さんがそちらに嫁撃するかもしません”

何か突撃という言葉とは違つた気もするが、こんな言葉を急に聞かれ達也は驚いた。しかし彼はすぐに理解することとなる。

この連絡の少し後、自分の周りに何かが定義されていくのを感じたからだ。

思わず『精霊の眼』^{エレメンタル・サイト}で見てみると、自分の隣に望夢という存在が形成されていく。つい『術式解体』で定義破綻させたがこの行動を彼はすぐに後悔することになった。

なんと今度は自分の周りに十人の望夢が形成されていく。この時達也の脳裏に浮かんだのは地獄だつた。

達也は元より、望夢の自分に対する感情が何かがおかしいと感じていた。その感情が何かまではわからない。だがこのままにした場合、深雪視点では達也の周りに突如十人の女性が現れていくことになる。

——その先は地獄である。このご近所一帯が季節外れの吹雪になることは想像に難くない。それだけは何が何でも阻止しなくてはならない。

幸い真夜の忠告のお陰でC A Dは準備万端だ。深雪に何も悟らせてはならない、ただその一心で彼は自分の持ち得る限界の速度で定義を破綻させた。

「どうだ、深雪。勉強は順調か？何かわからないことがあつたらすぐに聞くんだぞ」

「——お兄様……！深雪のためにそんなんにも……」

こちらはこちらで奇妙な事態になつたが、達也は胃がキリキリと痛みながらも、無事にこの日を乗り越えたのだった。

一話

時は流れ、私は無事に第一高校へと入学することが出来た。結果は言わざもがな主席。そして達也に拒絶され続け、遂に毎日。

途中何度も心が折れかけたが、達也に褒めてもらうという目標のためだけにここまで頑張ってきた。これで褒めて貰えなかつたら私はどうなつてしまふんだろうか。きっとそんなことは無いと思うが少し気になつてしまふ。

だがその前に、主席合格者としての答辞をバツチリと決めてしまおう。喋る内容はあらかじめ学校側が用意してくれることだったので任せたのだが、是非とも四葉の名を冠する者としての答辞をお願いします、と頼まれてしまつたたら仕方ない。お望み通りの答辞をするしかない。

いよいよ私の名前が呼ばれる。私の名前が呼ばれるだけで会場にはどよめきが広がる。それでも私はあらかじめ決められていた内容を読んでいくだけ。それは勿論、ただただ当たり障りのない内容なのだがどうやらこんな内容でも響く人には響くようで沢山の人が真剣に聞いてくれている。

ここで大体の内容を読み終えた私は少しだけ間を作り、会場全体を見渡す。それぞれ別の場所にいても目立つ達也と深雪さんを見つけることは随分と簡単だった。私はその二人に向けて少し微笑んでおいた。たつたそれだけのことで会場からは「おお！」と言う声も聞こえてきたことに少し笑つてしまう。

これから話す内容はそんな君たちに向けての、正しく意味を理解するのもう少し後になるだろうが、重要な言葉なのだから。

「改めまして皆さん、私は四葉 望夢です。ここにいる大半の人は最近公開された四葉家現当主の娘、それも次期当主という情報に驚いた

のではないでしようか。では何故このタイミングで公開されたのか。
その理由の真意を説明しましょう」

これから話すことは、幸せな高校生活を送るための重大な布石だ。
だから私はあえてこの場を借りて宣言する。

「これから二年間、私は一科生二科生問わず第一高校内限定で婚約者
を探します。ただし興味のある方へは私からアプローチしますので、
仮にそちらから過剰なアプローチがあった、もしくは私がアプローチ
している人に何らかの危害を加えた際には四葉としての返答が来る
ことを理解しておいてください。以上です」

……やりきつた！これで私が達也へとアプローチを仕掛けても誰
も何も言えなくなつたに違いない。後は達也に積極なアプローチを
仕掛け、学校公認の仲にしてしまえばいくら達也といえど拒否できな
いに違いない。そして既成事実さえ作つてしまえばお母様であつて
も文句は言えないはず。

——ああ、我ながら完璧な作戦だ。……少しだけ待つていてね私の
達也、貴方は私のものだから。

二話

答辞を終えた私はクラスを確認するためにIDカードを貰いに行き、A組だということを確認してすぐに帰路に就いた。

さて家に着いたわけだが私には用事があった。というのも流石に今日のことはお母様に話をした方がいい気がするのだ。なのでわざわざ四葉本家と秘匿回線を繋いであるテレビ電話を創つてみた。

今更だがこの魔法も便利なものだ。結果さえ想像出来れば過程なんて全て私に対しても都合のいいように創れるのだから。だからといつて結果が想像出来なければ使えない、という意味でもあるのだが。例えば、自分の視たい場所がどこでも視れるなどという、主に知覚系統の魔法は創るのが難しい。

とまあ無駄な思考はここまでにして電話をかけることにする。

電話をかけてから少し時間が経つた後、ようやく声だけが聞こえてきた。いきなり知らない番号から電話がかかってきた場合は最初からテレビ通話は難しいものかと思い、とりあえず用件を伝える。

「望夢です。お母様に直接話したいことがあるんですけど今大丈夫ですか？」

「勿論大丈夫よ望夢さん！やつと電話しててくれたのね！あの日望夢さんが家出してから私が一体どれだけ寂しい思いをしていたか！家もわからぬから電話も出来ないし、でも今回の電話で位置は特定しましたからね。家に帰つてこないのなら、たまには親と話しをするのも子どもの義務だと私は思いますよ。そもそも――」

名前を告げた瞬間にはすぐに映像がついたことには驚いた。こんなに単純だといつか私のことを装うオレオレ詐欺にも引っかかるのではないかと心配になる。

：親馬鹿も拗らせるところまで酷いことになるのかあ、なんて思いながら長くなりそうな話をぶつた切ることにした。

「話の途中ですが、お母様に伝えたいことがあります」

「……もう、なんでしょう」

「今日入学式の答辞を読んだのですが――」

「答辞、ということは主席で第一高校へと入学したということね！あの深雪さんを押し退けて主席なんて流石は私の娘ね！あ、その前にまでは入学おめでとう、入学祝いが欲しければ何でも言つてちようだい。それにしても」

「その際に！これから二年間、第一高校内で私の婚約者となる人を探して、好きと思つた人には私から告白しに行く、と宣言したのでそのつもりでお願いします。後、もしかしたら直接家の方に手紙が届くかもしれませんがそれは全て無視してもらって大丈夫ですので」

「……それは本当の話かしら？」

「本当の話です」

「……親としても四葉としても、その、とても困るのだけれど」「知りません」

「私の予定では、達也さんと深雪さんがそれ相応の地位を得るまでは望夢さんに隠れ蓑となつてもらう予定だつたのだけれど……」「知りません」

「せめて、第一高校内限定じやなくそれ相応の家であれば誰でも大丈夫、ということにしないかしら？さつきのだと外聞も悪いし、他の十師族から文句を言われかねないし。内容の訂正は四葉の方でやつて発表しておくから。だから、ね？」

「……わかりました。しかし私は達也以外と結婚するつもりはありませんので！」

「それだとどうしても四葉から好かれる一般人の構図が出来上がつてしまつて目立つと思うのだけれど。どうしても告白しに行くのかしら？」

「もう、しつこいお母様は嫌いです！この前も言つた通りお母様が認めてくれるまで絶対に家には帰りませんので！それでは！」

嫌いという言葉に反応してお母様はぐつたりとしたが間髪いれず

そう告げ私は電話を終わらせた。

*

高校生活二日目、といつてもいきなり授業があるわけではなく今日は授業の履修選択さえやれば、後は先輩たちの実演を見学しに行つたりなど自由とのだつた。かく言う私は、魔法よりも興味深いものを調べに図書館に行くことにした。

さて、わざわざ図書館に来て調べたいこと。それは私の持つていてる二つの大きな感情の内一つである『愛情』だ。もう一つの『貪欲』つまりは『独占欲』も大体は『愛情』から膨れ上がることが多いため、自分の感情くらいは詳しく知つておくのも大事か、と思い調べに来たのだ。

それにこれからは達也に存分にアピールすることも出来る。つまり、恋心というものを詳しく知ることによつて、これまでどれだけアピールしても全く揺れ動かなかつた難攻不落の達也を落とすことが出来るかもしぬれない、そう思い私は読書に没頭するのだつた。